批評と紹介

M.S.ゴードン著
千の剣の破壊
——サーマッラーにおけるトルコ系軍人の歴史
（ヒジュラ暦200〜275年/西暦815〜889年）——

中野さやか

本書は、M.S.ゴードン氏が1993年にコロンビア大学に提出した学位論文The Breaking of a Thousand Swords: A History of the Turkish Community of Samarra (218-264 A.H./833-877 C.E.)をもとに、対象とする年代をさらに広げて、アッバース朝のトルコ系軍人を分析した新著である。現在マイアミ大学史学科で助教授として教鞭を執るゴードン氏は、これまでトルコ系軍人に関する論考を数多く発表しており(1)，本書はその研究成果の集大成である。

本書において著者は、アッバース朝のトルコ系軍団を社会政治史の枠組みのなかで論じ、その分析を通じて奴隷軍人が国家の統治機構に与える影響を示そうと努めている。ここにいうトルコ系軍団の設立は、イスラーム史を特徴付けるマムルーク軍の創立であるとされることが多い、それと同時にイスラーム世界の従来の統治機構を覆す変動期の幕開けとしても位置づけられ、これまで多くの研究者がその重要性を指摘してきた(2)。著者はこれらの先行研究に依拠しつつも、軍団の内部構造と史料から判別できる個々の軍人を徹底して分析することにより、軍団とそれを取り巻くアッバース朝社会との相互関係を明らかにした。その上で彼は、本来イスラーム世界にとって異分子であったトルコ系軍人が、アッバース朝社会の一員となっていく経緯を解明し、アッバース朝の統治機構の変動に対する新たな視点を提示している。本書によって初期アッバース朝の社会政治史研究が新たな局面を迎えたことは間違いいないであろう。

以下に、各章の内容を述べ、本書の概要を示す。
まず序章において著者は、トルコ系軍団を分析するにあたり、これを純然たる軍事機関としてではなく、アッバース朝社会の一員と見なす視点を示す。続いて軍団内部に存在した有力将軍と下級兵士というヒエラルキーを指摘し、この階級間の不均衡が9世紀中葉のアッバース朝社会政治史を読み解くうえ
で重要な鍵となることを示唆する。

第1章「初期段階」第1節「近衛隊の出現」ではカリフの親衛隊としてのトルコ系軍団の成立過程を概観する。ここで注目すべきは、軍団設立のため
にアッバース朝政府が購入したトルコ系奴隷のなかに、中央アジアからイラ
クへ連れてこられた「草原の」トルコ人（The "steppe" Turks）と、家内
奴隷としてすでにパグダードに存在した「バグダードの」トルコ人（The
"Baghdadi" Turks）の2種類があったという指摘である。「バグダードの」
トルコ人は、イラクに来て間もない「草原の」トルコ人に、カリフ親衛隊と
しての訓練を施すための人材として購入されたという。彼らはごく少数であっ
たが、のちに「草原の」トルコ人とカリフとの間を取り次ぐ仲介役として台
頭し、絶大な権力と富を独占する有力な将軍となった。この分析によって著
者は、設立時点から軍団内には階級間対立の萌芽が存在し、それが軍団への
編入経路に基づいていたことを論証したのである。

第2節「マームーン：権力の強化」ではアッバース朝7代目カリフ、マームーン（al-Ma’mūn, 在位813-833）がトルコ系軍団の設立に着手した政治的
背景が述べられている。ホラーサーン総督であったマームーンは、異母兄
弟である6代目カリフ、アミーン（al-Amīn, 在位809-813）を殺害し、新カ
リフとしてパグダードに入城した。しかしパグダードの王朝正規軍はアミー
ンを支持していたため、自己の支配力を支える親衛隊の必要を感じたマームー
ンは、自分の勢力が及ぶ東方から、ターヒル朝やサーマーン朝を通じてトル
コ系奴隷を購入し軍団の設立に着手した。

第2章「サーマララーへの移住」第1節「ムタスィムとパグダードからの
出発」では、836年に起こったサーマララーへの遷都の背景に、パグダー
ドでの王朝正規軍とトルコ系軍団の対立があったことが明示される。833年
にはマームーンの兄弟であるアブー・イスハード（Abū Išḥāq）が、8代目
カリフ、ムタスィム（al-Mu’tašīm, 在位833-842）として即位した。アブー・
イスハードはマームーンからトルコ系軍団の設立とその管理を委任されてい
た人物であり、この軍団の実質上の統轄者であった。彼の即位に対して、マームーンの息子であるアッバース（al-‘Abbās）をカリフに推していた王朝正
規軍が反発したが、実際には彼らの反発は、自らの地位を脅かす新たなカリ
フ親衛隊、すなわちトルコ系軍団に向けられたものであった。ムタスィムは、
このトルコ系軍団と王朝正規軍との政治的対立を解決するため、トルコ系
軍団を率いて836年にパグダードの北方に新たに築いたサーマララーへ移
動したのである。

第2節「サーマララーへの定住」では、サーマララー遷都後のトルコ系軍
団の組織化について分析がなされている。ムタスィムはトルコ系奴隷を組
織化する過程で、「バグダードの」トルコ人を「草原の」トルコ人の指導役として重用した。ここで注目すべきは、「バグダードの」トルコ人にとって、カリフと「草原の」トルコ人の仲介者となることとは、トルコ系軍団内に地歩を固める機会であったと同時に、カリフと個人的な関係を結び、政府内で大きな影響力をふるうための契機でもあったという点である。

第3章「サマッラーにおける政治闘争」第1節「トルコ系指導部の影響力」では、サマッラー遷都後に起こったトルコ系軍団と政府側との権力闘争が分析されている。軍隊として組織化されたトルコ系軍団は、バーバク（Bābak）の乱など帝国各地の諸反乱を次々と鎮圧し、サマッラーにおける一大勢力となっていた。その過程で「バグダードの」トルコ人は有力な将軍となり、政治に干渉するようになった。これに対するアッバス朝宮廷側の反発は激しく、10代目カリフ、ムタワッキル（al-Mutawakkil, 在位847-861）はトルコ系軍団の勢力を削ぐために、ペルシャ人やアラブ人などから成る新軍団を設立し、サマッラーに代わる新首都をシリアに選ぶことさえした。しかしこの強硬手段は、かえってトルコ系軍人たちに反対勢力の排除を決意させることとなり、861年にムタワッキルは反対派のトルコ系軍人にによって殺害された。

第2節「無秩序の開始」では、861年から870年までに及んだ軍団内部の権力闘争を分析し、軍団内部の対立がこの時期のアッバス朝社会の混乱の要因であったことを示している。861年にムタワッキルを殺害したトルコ系軍団は、以後、11代目カリフ、ムンタスィール（al-Muntaṣir, 在位861-862）、12代目カリフ、ムスタイーン（al-Musta'īn, 在位862-866）、13代目カリフ、ムウザッブ（al-Mu‘azz, 在位866-869）、14代目カリフ、ムフタディー（al-Muḥtaḍī, 在位869-870）を次々と傀儡化、または殺害していった。

このような表面的にはカリフを凌ぐ権力を手中にしたトルコ系軍団であったが、彼らは決して一枚岩ではなく、その内部には有力将軍どうしの派閥抗争と有力将軍に対する下級兵士の反発という二重の対立関係が存在した。この時期のアッバス朝は、大規模な軍隊を抱えていたことに加えて、有力将軍たちが富や権力を独占しようと抗争を繰り返して行政機構を混乱させたために、慢性的な財政難へと陥っていた。そのため給料支給が滞って困窮した下級兵士たちは有力将軍たちに対する不満を高めていた。このような有力将軍と下級兵士との対立は、865年にバグダードとサマッラー間での内乱へと発展した。この内乱は、ムスタイーンを傀儡化し権力を独占していた有力将軍ブグラー（Bughā the younger）とワシフ（Waṣif）に対し、トルコ系下級兵士たちが不満を爆発させたことに端を発している。下級兵士たちの暴動を恐れたブグラーとワシフはバグダードへムスタイーンを移したが、
その間にサーマッラーのトルコ系軍人たちはムウタッズを13代目カリフとして擁立し、バグダード側と争った。両者の抗争はアッバース家やバグダード市民などを巻き込み、帝国全体を混乱させたが、866年にバグダード側の敗北によって終結を迎えた。この内乱によって軍団内部の亀裂はさらに深まり、内乱終結後も有力将軍同士の派閥抗争と彼らに対する下級兵士の暴動は絶えることはなかった。

このような混沌とした状況にあって14代目カリフ、ムフタディーは有力将軍たちから権力を取ろうとする、非トルコ系軍団を設立し、さらにはトルコ系下級兵士たちと手を結ぼうとした。しかしムフタディーが有力将軍であったアブー・ナスル・ムハンマド（Abū Naṣr Muḥammad）とバーヤクバク（Bāyākbāk）を殺害すると、下級兵士たちはムフタディーから離反し、これによってムフタディーは廃位へと追い込まれた。ここで著者は、有力将軍と下級兵士間の対立が決して軍団内の普遍的な状況ではなく、個々の有力将軍の派閥には一部の下級兵士たちが組み込まれていたことを指摘し、それらがムフタディーから離反した根拠としている。

第4章「権力の行使」第1節「影響力の源」では、トルコ系有力将軍が政治権獲得のために用いた手段と自らの正当性を示すためのイデオロギーについて分析がなされている。

著者は彼らの政治権獲得のための手段を以下のように区分する。

1）カリフとの関係。アッバース家と姻戚を結び、有力将軍が次期カリフである皇子たちの後見人となることによって、「子」であるカリフと「父」たる有力将軍という主従関係の転倒が起こった。これによって彼らはカリフに対し強力な影響力を保つことができた。

2）官職の利用。軍団内の有力将軍と下級兵士間の絆結びは、軍団内のヒエラルキーによるものと個人的な関係によるものに二種類に大別され、そのうち個人的な関係が有力将軍の派閥を形成し、上述した有力将軍と一部の下級兵士間との特別な絆結びをなす。有力将軍たちはカリフから総督に任命されると、割り当てられた地域に派閥内の軍人を総督代理として派遣し、利益を分配することで派閥を維持していた。つまり下級兵士にとって有力将軍の派閥に参加するということは、権力を得ることを意味していたのである。

また派閥の維持には、支持者たちに官職を与えるとともに、自分の収入を分配することも必要であり、有力将軍たちは自らの勢力を保つため、多大な出費を覚悟しなければいけなかった。そこで著者は、自らの派閥を有していた有力将軍たちによる財源の確保が、土地所有形態の変化を引き起こしたと論じている。トルコ系軍人たちの収入源は、私財、官職に就いた結果、利用できるようになったハラージュイ、イクターからの収益の3種があり、このな
かで著者が最も重視するのが、イクターからの収益である。Cahen による
と、この時期のドル科系軍人の土地所有形態は、軍人に土地の管理と徴税権
を委任する軍事イクターの原型であった (3)。著者は、869年に行われたム
フタディーと下級兵士間の交涉に関するタバリエ （al-Tabari）の記述から
iqṭā' の単語を拾い出し、これに対し詳細な分析を加えることで Cahen の
説を裏付けています。
また有力将軍たちは、自らをイスラーム共同体の一員として正当化するた
めに、モスク建築やメッカ巡礼、「ジハード」としてのビザンツ遠征などを行
い、イスラームへの献身を表明した。これに関し著者は、彼らがあくまでも
手段としてイスラームを用いただけであり、有力将軍であった大プガー
(Bughā the Elder) と彼の息子であるムーサー・イブン・プガー（Mūsā
ibn Bughā）以外はイスラームに特別な関心を払わなかったと論じている。
第 2 節「トルコ系軍人の権力に対する反応」では、トルコ系軍人のに対する
同時代の人々の認識について、同時代史料や詩文から分析がなされている。
ここで著者は、同時代人が有力将軍たちによるイスラームへの献身を表明す
る演出に対しては懐疑的であったものの、彼らを異端や社会のアウトサイダー
としてではなく、イスラーム共同体の一員でありながら規律を守らない者と
見なしていたことを明確にする。当時の歴史的記述は、高い地位に就きなが
ら略奪や不正を繰り返す者として、トルコ系有力将軍の行為を非難したもの
がほとんどであるが、大プガーとムーサー・イブン・プガーに関しては例外
的に「王朝の守護者」であり「ムスリムとして敬虔なる者」であったと賞賛
が与えられている。著者は、ムーサー・イブン・プガーが巡礼路の安全を確
保するために行ったヒジャーズへの遠征や「強大なカリフによる統治こそ安
定と繁栄をもたらす」という大プガーのカリフ論、4 世紀正統カリフ、アリー
への傾倒から、実際に彼ら親子が国家とイスラーム共同体の繁栄に大きく貢
献したと判断している。
結論を示す最終章においては、15 世紀カリフ、ムウタミド (al-Mu'tamid,在位 870-892) の治世中に、アッバース朝政府がトルコ系軍団を巻き込みな
がら、帝国の統治を正常化させていく過程が分析されている。15 世紀カリフ、
ムウタミドの即位（870）は、非トルコ系軍団の支持を受けていたムフタディー
の廃位を同時に意味し、しかしトル科系軍団が政府内の権力抗争に勝利したことを
意味していた。しかしこの時点までに、権力闘争によってトルコ系有力将軍
たちの多くは戦死し、また下級兵士たちはまたの暴動をもってしても自ら
の経済的状況を改善できなかったことを自覚しており、サマッダーでの政
争は一応の静まりを見せていた。この時期のアッバース朝政府の実質的な支
配者であったムウタミドの兄弟ムワッファク（al-Muwaffaq）は、この機

037
会を逃さず、ムーサー・イブン・ブガーと信頼関係を築き、ザンジブ（Zanj）の乱やサッファール朝など、イラクへ攻め込んできた諸勢力の鎮圧と排除を開始した。サッファール朝やザンジブの反乱軍との戦いは熾烈を極め、この戦いに従事したトルコ系下級兵士たちの多くは戦死した。それに加えて、有力将軍たちのうち唯一生き残ったムーサー・イブン・ブガーがアッパーズ家へ服従し、進んで国家体制の正常化に努めたことによって、アッパーズ朝政府の支配はようやく正常に復したとされる。

以上が本書の概要である。本書の特色は、トルコ系軍団をマムルーク軍の萌芽的在り方として扱い先行研究が多いなかで、あえて時代を815年から889年と限定し、徹底して軍団内部の実態の解明に努めたところにある。特に、バグダードで購入されたトルコ系奴隷が、カリフと中央アジア出身のトルコ系奴隷との仲介役として台頭し、有力化していったことや、有力将軍たちがアッパーズ家との婚姻関係や経済力を利用して自らの勢力を基盤を保っていたことなどは、本書が初めて明らかにしたことである。とりわけアッパーズ朝社会のなかでトルコ系軍人がどのように他者と関わり、また認識されていたのかという第4章の分析こそが、アッパーズ朝の社会政治史研究のなかで独自の貢献を示している箇所である。

一方、9世紀のアッパーズ朝社会を分析するうえで重要な人物であるムーサー・イブン・ブガーを、たんに類型的に分析している第4章第2節から結論部分に関しては、論の展開にきわまる無理があると言えよう。著者は、トルコ系軍団内部の権力抗争を勝ち抜いたムーサー・イブン・ブガーを「アッパーズ家に忠実なムスリム」と見なし、これを本来イスラーム世界では異分野であったトルコ系軍人が、イスラーム共同体へ定着したモデルとしている。しかしムーサー・イブン・ブガーがムタワッキル殺害に関与していることに関しては何の説明もせず、また876年に彼が反乱軍の侵攻を恐れてファールスの総督を返上した事件を(4)、アッパーズ家への忠誠ゆえの謙譲と見なすなど(p.145)、ムーサー・イブン・ブガーに対する著者の解釈はかなり強引なところがある。

実際にはムーサー・イブン・ブガーは、巡礼路の確保のために長期の遠征を行い、ムワッファクと協力し統治機構の正常化に努めた一方で、ムタワッキル殺害や反乱鎮圧の任務の放棄なども行っていた。彼のこのような行動は、ムワッファクが、父親であるムタワッキルと敵対したムーサー・イブン・ブガーと信頼関係を築き、諸反乱の鎮圧に努めたこととも通じる。このような彼らの行動に関しては、政府が混乱していた状況にあって、政権掌握の機会を窺いながら臨機応変に行動していたことが、一見すると一貫性に欠けた行動をとらえたという解釈がより適切と言えよう。つまりムーサー・イブン・
ブガーの一見矛盾している行動に対し、著者が詳細な分析を行っていたば、それを通じて9世紀後半のアッパース朝政府における個々人の在り方の一端をさらに明らかにできたのではないだろうか。

以上、第4章第2節から結論部分に関して若干の批判を述べたが、いずれにせよ本書の目的はサーマッラーにおけるトルコ系軍団の実態の解明にあり、著者がそれに関する重要な視点と分析を提供していることは変わりはない。前述したように、この軍団の設立はイスラム史を特徴付ける軍事制度の開始と見なされることが多く、さらに従来の統治機構を覆す軍事イクター制度への転換でもあったとされている。よって本書はイスラム世界の軍事制度と初期イスラム史の社会政治史に関する研究を行う者にとって、自らの研究を深めるきわめて有用な文献であると言ってよいだろう。

注
(1) 著者がこれまでに発表したトルコ系軍人に関する論文は以下の通りである。


